

令和7年度 第1回学校運営協議会（学校魅力強化委員会）議事録

1 期 日：令和7年5月22日（木） 15：00～17：00

2 場 所：有田工業高校 会議室

3 出席者：外部委員9名（校長を含む）、欠席4名

事務局（本校職員）12名、欠席1名

4 議事録

(1)開会

以下の4点について連絡し、出席されている委員に承諾を得た。

- ・「佐賀県立学校運営協議会の設置等に関する規則」の第8条に基づき、本協議会は公開であること
- ・傍聴希望は、事前申請のうえ、傍聴可能となっていること（本日は傍聴希望なし）
- ・議事録作成や活動実績報告のため、事務局で音声記録や写真等を撮ること。
- ・「佐賀県立学校運営協議会の設置等に関する規則」の第7条第2項「協議会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない」を確認し、本会議は過半数以上の出席を得ており、会議は成立していること。

(2)任命状交付

- ・机上交付とした。

(3)学校長挨拶

以下4点の内容に触れ、挨拶とした。

- ・コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）4年目の実施となること。
- ・唯一無二の誇り高き学校として、県内外からの志願者増、学校の魅力化に取り組むこと。
- ・「地域を愛し地域に愛される学校づくり」をテーマに、更なる地域との強固な結びつきを目指して取り組むこと。
- ・「唯一無二の学校魅力化促進事業」として、県内外からの志願者増、地域みらい留学等に取り組む中で、「個々の生徒にとっての唯一無二の高校」を目指すこと。

(4)佐賀県教育委員会事務局挨拶

- ・今回は出席なし。

(5)委員及び本校事務局教職員の紹介

- ・自己紹介を行った。

(6)会長及び副会長選出

- ・「佐賀県立学校運営協議会の設置等に関する規則」第6条第1項の「協議会に会長及び副会長を置き、委員の互選によってこれを定める」という規定に従い、立候補を求めた。立候補はなく、事務局にて会長及び副会長を推薦し、出席されている委員の承認を得た。

(7)会長挨拶

- ・会長としての抱負を述べられ、挨拶された。

(8)説明事項（進行は会長）

①学校運営協議会制度について

- ・主幹教諭より、配付資料をもとに、学校運営協議会制度について説明を行った。

②SAGA 唯一無二の学校魅力化促進事業について

- ・主幹教諭より、配付資料をもとに、学校運営協議会制度について説明を行った。

9 議事（進行は会長）

(1) 令和 7 年度 学校運営の基本方針等について

・ 学校長より、配付資料をもとに、以下の 3 点について要点を簡潔に説明した。

① スクール・ミッション及びスクール・ポリシーについて

② 長期経営計画及び本年度の教育目標（学校要覧 P. 7-8、P. 57-58）

③ 令和 7 年度 学校評価計画について

(2) 質疑応答

意見①：有工の卒業生の話では、30 キロマラソンは卒業後も思い出深い学校行事のようである。みんな涙が出るくらい感動的で、応援していたことも懐かしさを感じているようであった。昔は 100 キロ走っていた時代もあったようである。

質問①：定時制課程の佐賀北高校（通信制）との単位互換については、他の学校との単位互換制度はあるのか。

回 答：定時制課程は、4 年間で卒業だが、3 年間で卒業したいという定通併修の生徒に限り、2 年生と 3 年生の期間に、本来 4 年生で取得すべき単位数を、佐賀北高（通信制）で、月に 1 回授業を受けて単位取得するという制度がある。

質問②：中学校も少子化の煽りを受けて、有田町の中学校は 6 年後には統合していくという話も出ている。地域みらい留学制度の導入により、今 14 名ほどの生徒がその制度を利用されているということだが、地域みらい留学生の一人住まいに関する支援や有田町との連携、地域みらい留学の出身地、進路先を教えてください。

回 答：・ 地域みらい留学制への支援としては、

① 有田町より生活支援金 3 万円

② 有田町と連携してアパートの提供を家賃 3 万円で支援金に合わせた設定

③ 医療費ひと月 1,000 円を上限として受診（薬代の自己負担なし）できる。

④ 住まいは、地域みらい留学を運営しているプラットフォームが提供するシェアハウス（男子棟・女子棟あり、寮監付き）がある。

⑤ 安心できるような環境整備としてハウスマスター制度（生活の見守り）などがある。

・ 地域みらい留学生の出身地は、東京、神奈川、埼玉、広島、福岡、大分、長崎、鹿児島である。

・ 地域みらい留学の全国募集は、デザイン科とセラミック科のみ。特色ある学科に魅力を感じ志望している。野球部を目指してくる生徒も一定数いる。

・ 地域みらい留学生の進学先（令和 7 年 3 月卒業生）は、東京都にあるデザイン専門学校へ進学している。

質問③：昨年度、電気科の志望者が少なかったという事実があった。このような状況を踏まえ、電気科を地域みらい留学制度の対象とすることはできないのかという疑問を持っている。制度の詳細については完全に理解していないが、「電気科には特色がある」として対象に含めることはできないか。

回 答：現状では県教育委員会が対象となる学科を指定しており、電気科はその中に含まれていない。

地域みらい留学の導入時は、デザイン科とセラミック科で始まっている。セラミック科では、もともと県を越えて留学生がいた。陶芸家の子どもさんたちが入学してきていた。学校の周りには下宿先もあったこともあり、導入しやすいというようなことで、特に九州でも珍しい学科の 2 つというような形で指定をされている。電気科や機械科もとなると、県内全部の工業高校に、電気科と機械科はあるので、やはり特色を活かしてということでセラミック科とデザイン科が指定されている。

意見②：「地域みらい留学」に対する関心が高まっていることを肌で感じている。特に県外のみならず、県内からの問い合わせも増えてきており、自身のところに

も相談が来ている。詳しい内容については県の管轄であるため詳細には答えていないが、県内の公立高校及び市役所から問い合わせがあった。

意見③：このような動きの背景には、その地域における生徒数の減少などがあるのではないかと。

意見④：先ほど言われた問い合わせがあることはすごくいいことだと思うので、その時に、有工にその問い合わせを聞いてくださいという対応をとれば、もしかしたら、地域における課題を共有できるようになり、課題を抱えた地域同士が繋がっていくことになるかもしれない。

(3) 令和 7 年度 学校運営協議会の年間計画

- ・主幹教諭より、配付資料をもとに、学校運営協議会の年間計画を説明した。
- ・昨年度の学校運営協議会において、委員より提案された「グランドデザインを読み込む時間」の実践報告をした。

(4) 質疑応答

質問④：実施して、その反応・結果はどうだったか。

回答：実施後のアンケートは取れてないが、今年度も 7 月に学校魅力評価システムアンケートを実施するので、そこで「グランドデザインについての理解が深まったか」というデータが出る。第 3 回の学校運営協議会でそのデータを報告する予定である。

意見⑤：・読み込むだけではなく、ディスカッション形式やワークショップのような形式で実施すれば、生徒たちも主体的に考えることになり、効果的なグランドデザインの浸透ができるのではないかと。

- ・学校生活の中で、「どのように行動すれば、この指針に沿うことになるのか」「この時期にはどのような行動が必要か」など、みんなが考える場を設けることが効果的ではないかと考える。

意見⑥：・「グランドデザインを読み込む時間」は、ワークセッション加え、生徒会の取組を入れ、そこに「自分たちでやった」という実感を得られるような活動があれば、生徒にとっての有用感や、学校運営への関与意識が高まるのではないかと。

- ・中学生には難しい部分もあるが、高校生であれば、地域のケーブルテレビなどで紹介されている活動を見ても、対応できる力を持っている生徒が多いという印象がある。

意見⑦：・生徒に対して行動を促す、あるいは意欲を高めるための方法として、「校内放送」の活用が考えられるのではないかと。

- ・校内放送が現在も活用されているのであれば、生徒が生徒に向けてメッセージを発信する場として機能させることができる。
- ・生徒自身が主体となって発信することで、より効果的に働きかけができると考えられ、そうした活用の可能性を感じた。

意見⑧：・PTA の全国大会や九州大会などで配られるお土産として、お菓子よりも有田焼が圧倒的に喜ばれるとのことで、地元の焼き物が評価されていることに誇りを感じた。

- ・実際、有田焼を「自分へのご褒美」「特別なもの」として購入しており、毎年買っているという声もあった。
- ・子どもの頃は陶器市での手伝いをしていた経験があるが、地元の子どもたちにとって有田焼は当たり前存在だが、全国・世界的に見ると非常に価値ある文化財・工芸品であることを、あらためて伝えていく必要があると感じている。

- ・有田焼を通して、「自分の努力や行動が人を喜ばせることができる」という体験を、生徒たちにも味わってほしい。そういった経験は、自己肯定感を高め、地域への誇りを育むとともに、他者への思いやりや、より良いものをつくろうとする意欲にもつながる。
- ・有工の生徒たちにも、「自分たちの取り組みは将来につながっている」「今の努力が誰かの役に立つ」と実感してほしい。

意見⑨：・有田町では現在、「竜門ダムの今後の利活用」に関する課題に取り組んでおり、国立大学の建築学科の教授および学生（大学院生・学部生）を招いて、アイデア出し（サウンディング）を行っている。

- ・その際、ある教授より「自分の娘を地域みらい留学で有田工業高校に進学させたかった」との話があったが、結果的に「女子寮がなかったために断念した」との説明があった。その教授は「女子寮があれば、有工を希望する生徒はもっと増えるのではないか」との意見を述べた。
- ・その娘さんは最終的にある高専へ進学。教授曰く「ものづくりを希望する生徒は一定数存在している」とのこと。
- ・また、他の保護者からも「寮を作ってほしい」という要望が複数回あった。
- ・寮の整備は、県主導の案件であるが、県としても積極的に取り組んでほしい。
- ・グランドデザインの理解を深めるためのワークショップ開催について、近隣に佐賀大学、有田工業高校、中学校、小学校と教育機関が集まっている環境を活かし、どのような形になるかは検討の余地があるが、地域全体での理解促進につながる活動を実施することで、より良い取組になるのではないか。

意見⑩：・30 キロマラソンについては、過去に実施した際には、実施環境の整備に関して関係各所へ協力を依頼しながら運営を行った経験がある。終了後には、生徒や保護者から「良い思い出になった」との声が多数寄せられた。現代の状況に応じた実施形態の見直しは必要としながらも、何らかの形で継続し、今後も取り組んでいくことを検討してほしい。

質問⑤：・地域みらい留学については、さまざまな地域から生徒が来ていることに感心しているが、卒業後の進路についてのイメージが気になる。生徒の進路希望の傾向を知りたい。

- ・関東から九州へ進学するというのは大きな決断であり、保護者の理解や後押しが必要だと感じる。実際に保護者や生徒が有田を選んだ「決め手」が何だったのか、関心があるので教えてほしい。

回答：・地域みらい留学生が、本校を目指す理由と進路的なものについては、今の3年生では佐賀大学の芸術地域デザイン学部を目指している生徒がいる。進学・就職それぞれで、何か偏った特徴があるかということそうではない。

- ・関東から来ている理由は、プラットフォームの担当者とのオンライン会議の情報では、関東方面の保護者としては、関東の地域で目指す学校がなく、自分が行きたいところを探して全国に視野を広げてみて、落ち着いた環境で学びたいものを学べる学校を選んでいるという話であった。

意見⑪：・東京出張の際に、ふるさとセンターで、佐賀県の担当者から「有田に住みたい」という高齢者がいたとの話であった。移住を考えた理由は、「有田陶器市で地元の方によくしてもらったから」とのことであった。

- ・地域みらい留学担当として、地域みらい留学制度も長い目で見て、このように移住の選択肢に入り得る事業になるのではないかと考えている。高校3年間を有田で過ごしたことによって、将来的に有田に戻ってみたいと思

うようになる可能性もあるので、この地域みらい留学制度を長い目で見てほしいと思う。

- 意見⑪：**
- ・退職後に、有田への移住を考える方々への県や町から補助等があれば、可能性が広がることも考えられる。
 - ・質疑応答で、皆さんの意見や質問を共有することができて深まりのある協議会を、この一年間実施できればと考える。

10 意見交換（20 分）

テーマ：「SAGA 唯一無二の学校魅力化促進事業」について

- ・配付資料をもとに、SAGA 唯一無二の学校魅力化促進事業の事業計画書にて掲げている成果指標の達成に向けて、その取組・活動計画をみて、4 グループに分かれて意見交換することについて説明した。

【成果指標】

- ①今の生活の満足度（生徒 72%）
- ②県外からの体験入学 48 名以上、地域みらい留学志願者 5 名
- ③地域みらい留学希望者のオープンスクール参加者 8 名
- ④「自分の学校を中学生にすすめる」（生徒 83%、教職員 98%）
- ⑤「地域から大切にされている雰囲気を感じる」（生徒 80%、教職員 94%）

【意見交換の報告】

報告（A グループ）

- ①「今の生活の満足度（生徒 72%）」についての意見交換の報告
 - ・今の生徒が自分の学校の魅力を分かっていなくて発信できていないのではないか、Instagram の話が出て、その中で生徒に宣伝させることが一番だが、魅力を知っているのだろうか。
 - ・在学中に 1・2 年上の先輩達と触れ合うことで、この学校の良さを知って、先生と生徒だと距離感があるので、同じ距離感の相手である先輩達と触れ合うことで、学校の魅力を感じ、発信できればいいのではないか。
 - ・忙しい生活の中で、実施されている学校行事（マラソン大会等）の良さを在学中には分からない部分があるので、その中でも、特に卒業してから実感すること多いのではないか。
 - ・学校生活の中で、達成感、特に成功体験が生徒達の喜びにつながって、伝統行事やいろんな行事を学校の中で経験する中で、一人ではなく周りの友人の存在もあって、達成感をより感じやすくなるのではないか。
 - ・成功体験をより多くする中で、職業につながるものが望ましいが、職業に直結することは難しいことが予測される。しかし、成功体験が非常に生徒達の満足度につながっていくのではないか。

報告（B グループ）

- ②「県外からの体験入学 48 名以上、地域みらい留学志願者 5 名」についての意見交換の報告
 - ・地域に関係のある著名人やインフルエンサー、または町長などによる支援も、情報発信の強化に効果があるのではないか。
 - ・甲子園出場時にアクセス数が急増した事例を参考に、注目されるタイミングでの広報戦略が有効である。
 - ・学校独自の「マスコットキャラクター」の制作によるブランディング強化の提案。
 - ・地域みらい留学では、デザイン科・セラミック科に加え、電気・機械科の魅力も発信していくべきとの意見が出た。

- ・進路支援や特色づくりを通じて、学校と地域をつなぐ動きが求められる。

報告 (C グループ)

④「自分の学校を中学生にすすめる」(生徒 83%、教職員 98%) についての意見交換の報告

- ・中学校の授業(特に技術・家庭科)での作品制作時間が減少しており、現在では1時間程度にまで短縮されている。その中でも、ものづくりに関心のある中学生は一定数存在している。
- ・本校では陶芸体験などを実施しているが、体験できるのは基本的に「体験入学」のみで、回数や接点が限られている。体験の場を増やすことで、学校の魅力をより多くの中学生に伝えられるのではないかな。
- ・中学校などに作品を展示する機会を増やすことで、学校や生徒の活動を中学生や保護者に知ってもらうことができる。実際に在籍している生徒に「どのようなことを中学生に伝えたいか」を聞いてみるのも有効ではないかな。
- ・学校近隣では作品展示などの機会があるが、西有田地区では機会が少ない。吹奏楽部は西有田町でも演奏活動を行っているため、他の分野でも展示等を通じた地域との関わりを強化したい。例えば、本庁舎での展示など、有田町の協力を得た広報活動が必要ではないかな。

報告 (D グループ)

⑤「地域から大切にされている雰囲気を感じる」(生徒 80%、教職員 94%) についての意見交換の報告

- ・自身が高校時代に関わった「高校生クリエイター新聞広告作成プロジェクト」に採用され嬉しかったという経験が紹介された。
- ・子どものデザインがレスキュー車に使用され、現在も活用されているという事例が共有された。
- ・地域企業からの相談を受けて取り組んでいる学校制作物の地域での活用事例として、生徒がデザインした作品が、マスコットキャラクターとして採用されたり、ポスターに使用されたりしている。過去には広報誌に生徒作品が掲載されたこともあり、そうした機会の存在がモチベーションにつながるのではないかな。
- ・地域との関わりの方角性として、
 - ① 地域や町を代表するものを生徒が作ること
 - ② 長期的に地域に残る作品を生み出すこと
 - ③ 地域課題の解決につながる活動を行うことこれらの取り組みにより、地域との関係性を深め、生徒が「大切にされている」と感じる環境づくりが可能になるのではないかな。

11 諸連絡 次回は、8月上旬に開催予定

主な議事(予定): 令和8年度教育課程、令和8年度使用教科書について

意見交換(予定): 地域学習について

12 閉会